からこかぎ

第２５号　令和 元年 ５月１４日（火）発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会
〒 636-0247　奈良県磯城郡田原本町阪手233-1　唐古・鍵考古学ミュージアム内
℡ 090-9257-3688　Email : karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

会 長 挨 拶 （総会挨拶）

今西　和代

本日は、お忙しい中、「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」の定期総会にご出席いただき、ありがとうございました。選任いただきました運営委員を代表してご挨拶させていただきます。

今年度も、本総会で決定された活動計画にのっとり、唐古・鍵遺跡の保存と活用に係わる支援事業の一層の充実を図る所存でございます。とりわけ、重点事業と位置づけています「古代ものつくり体験活動」については、弓きりなど火熾し道具の検討を重ねていき、学校支援活動に反映していければと考えています。また、この間の懸案となっています青銅器・ガラスの溶融実験については、何とか製品の完成までこぎ着けたいと思っています。そのためには、鋳型の工夫が課題となっています。8月後半の土器作りの時期に試作品を完成できますよう、もの作りメンバーの頑張りに期待しています。

また、学史的に著名な唐古・鍵遺跡の価値を再確認するためにも、弥生ウォークを充実させ、さらには会報やホームページを通じ、弥生文化情報を発信していきたいと考えております。いずれも、今年度の重点事業と位置づけています。

昨年度末にはバス旅行で東海の弥生遺跡を訪れました。丹後・吉備・東海と続き、おかげさまで、ご参加いただいた方々に喜んでいただいております。今年度も、県外の弥生遺跡を訪れ、改めて唐古・鍵遺跡を見直す機会を持ちたいと考えております。

最後に、今年度重点活動として追加しました「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会の活動のあり方を検討」について一言ご説明します。

私どもの会は16年前に発足し、当時は、ミュージアムのガイドと学校支援活動を行なっていまして、会員数は50名を超えていたと記憶しています。会の転機は、今から7年前の平成24年に訪れました。当時、学校支援を中心とした会の活動の見直しがなされ、弥生もの作り活動、当時は弥生勉強会と呼んでいた弥生ウォークと広報活動を新たに行なうこととし、会報も発行されるようになりました。検討は、担当者と活動分野・内容がセットで論議され、実効性のある新規事業が誕生いたしました。当時は、会員数も30名を切るのではないかと思われるほど落ち込んでいましたが、その年の運営委員に新たに4名の方になっていただき、運営委員会も強化いたしました。その後は、皆様ご承知のとおり、学校

支援・もの作り・弥生ウォーク・広報と着実に活動実績を重ね、一時期は最大80名を超えるほど会として充実していました。

しかし、平成から令和と元号が変わる時期となり、平成24年当時の運営委員も高齢化が進行しています。初代会長の浦田さんをはじめ何名の方はお亡くなりになり、運営委員の中には体調を崩されている方もいらっしゃいますし、ご本人はお元気でも具合の悪いご家族がいらっしゃるとの話しも聞いています。

今回重点目標としています「会の活動のあり方の検討」は、平成24年当時の論議を再現していただき、今後の唐古・鍵遺跡を中心としたボランティア活動のあり方をを積極的に検討するというものです。16年間築き上げてきた唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会の活動を継続・発展するためにも必要不可欠な検討と考えています。検討メンバーも先ほどの運営委員会で選任し、年間を通じ論議を重ねる予定となっていますし、会員の皆さまのご意見をいただければありがたいと思っています。以上、今年度の活動にあたり、お願いを含め留意したい点を述べさせていただきました。今後とも、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

（平成31年度定期総会　閉会挨拶）

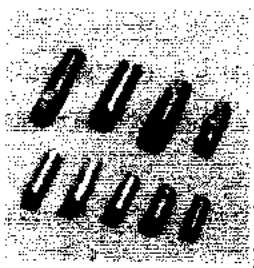
遺物紹介　碧玉製管玉

会報編集グループ

1　概要

今回は、ミュージアム第二室に展示されている２点の碧玉製管玉を紹介します。ミュージアム図録によると、1点は、第53次調査で出土した大型碧玉製管玉、もう1点は第61次調査で出土した未成品です。今回は、発掘報告書と唐古・鍵遺跡Ⅰ（特殊遺物 考察編）の「唐古・鍵遺跡出土玉類の産地分析（藁科哲男）」に基づいて報告します。

産地分析報告によると、遺跡からは管玉は66個出土しているとのことですが、全てが弥生時代のものとは限らないとのことです。碧玉製管玉は、唐古・鍵遺跡では、第65次調査・第33次調査・第61次調査・第69次調査など南エリアを中心に、第80次調査（西エリア）そして第53次調査・第72次調査・第76次調査（中央エリア）などから15点ほど出土していると記述されています。



管玉は、勾玉・丸玉・小玉などの「玉」の一種で縄文時代から奈良時代にかけて作られた細長い円筒形の装飾品です。弥生時代の管玉は、縄文時代のエンタシス状（胴体がやや楕円形）の管玉と異なり正円柱状です。碧玉製管玉は、朝鮮半島に祖形を持ち、弥生早期の「菜畑遺跡」（紀元前10世紀後半の国内最古の水稲稲作遺跡）からは朝鮮半島からもたらされた碧玉製の管玉（左上写真 ネット画像）が出土しています。これは、同じ玉製品の勾玉と違う点です。勾玉は、素材・形態とも国内固有のもので、縄文期の獣形勾玉が変化したとされています。

碧玉は、石英の一種で火成岩の活動期に熱水や地下水に溶けたケイ酸が沈殿したもので、国内では日本海側に露頭が多くみられ、石川県小松市菩提・滝ヶ原や島根県松江市花仙山や兵庫県豊岡市玉谷などがよく知られています。

2　５３次碧玉

遺跡中央エリアの水路改修工事に伴なう第53次調査では、前期・中期を通じ遺構・遺物も濃厚に出土しています。調査区南端の微高地から中期中葉の土坑８基と柱穴が検出され、うち１基の炭灰層をもつ土坑（炉跡）を中心に直径2.5mの円形の柱穴があり、発掘報告書は竪穴住居址としています。管玉はその近くから見つ

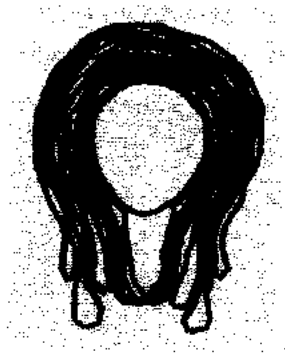
かりました。先述の報告では、検出遺構名が「現代撹乱」と表示されています。出土品（下写真 ネット画像）は、縦横ともに半分に割れていて直径2.24cm長さ3.4cmですが、中央付近で割れていると想定し復元推定長さ5cmとしています。管玉は、一般に直径8mm長さ3cm程度ですので、かなりの大型品です。

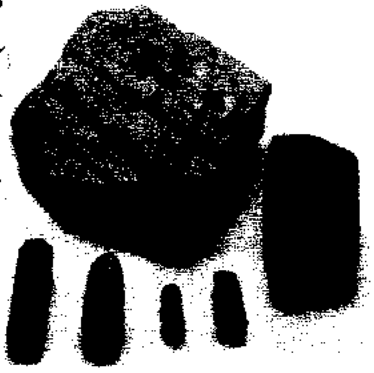
また、碧玉原産地分析結果は、「未定Ｃ遺物群」と判定されています。未定Ｃ遺物群は、先述した菜畑遺跡と同じ朝鮮半島に原産地を持つものですが、弥生早期以降も国内で流通していたものです。分析結果によると比重が2.576とのことですから、良質（比重が2.5以上の原石）な碧玉といえます。なお、南エリアの第33次調査中央の中期中葉末の小溝から出土した碧玉製管玉は、同じ「未定Ｃ遺物群」で比重も2.506と類似しています。

（15検体中６点が、2.2から2.3ですので緑色凝灰岩に分類されます。2.5以上は５点です。）

３　６１次碧玉

第61次調査は、第３次調査の西側隣接地にあたり濃密な遺構・遺物が検出されました。碧玉製管玉（右写真 ネット画像）は、調査地南端の不整円形土坑（深さ50cm逆台形）の上面から出土しています。土坑は、中期中頃の明灰色褐色砂質土で埋没しているとのことですから、中期中葉の未成品ということになります。玉生産で著名な京都府奈具岡遺跡（愛知県朝日遺跡が同時期）の生産開始時が中期中葉とされていますのでかなり早い時期の碧玉製管玉となります。出土品は、直径1.9cm長さ4.5cmのやや大型品ですが、発掘報告書によると全面に研磨が施されていますが一部割れ面が残り稜線も多く残っているとのことですので最終の研磨工程の段階の管玉と思われます。なお、碧玉原産地は、石川県小松市産の「菩提女代南Ｂ遺物群」（菩提・滝ヶ原）と判定されています。菩提・滝ヶ原の碧玉は、中期から後期を通じ鳥取から福井に至る日本海側を中心に製品のみならず石材も流通していたとされています。兵庫県尼崎市田能遺跡16号墓（中期後葉）に副葬された632点の碧玉製管玉（左写真 復元画像ネット）のうち200点ほど分析調査がなされ、未定Ｃ遺物群75点（37%）・菩提女代南Ｂ遺物群55点（27%）との報告がなされています。また、からこかぎ第22号で遺跡紹介しました京都府市田斉当坊遺跡では、中期の竪穴住居３棟から菩提女代南Ｂ遺物群の碧玉・石核・剥片（右写真 ネット画像）が多く出土しています。そこからは、サヌカイト製磨製石針・紅簾片岩の石鋸片などの工具類も出土していて玉作り工房と考えられています。





管玉は、原石の調整→分割→形割→側面調整→研磨→穿孔→研磨の工程で作られます。玉の製作の可能性は、竪穴住居の工房跡、原石や製品さらには未成品・残材（剥片）の出土に加え、工具類（溝切り・切断・平板用の石斧やくさびや石鑿（のみ）、穿孔用の錐や砥石など）の出土、さらにピットからの研ぎ汁や金剛砂の検出など最近は多様な視点で検討されています。

４　さいごに

唐古・鍵遺跡出土の碧玉製管玉は、直径と全長がほぼまとまった玉が複数出土する北九州・丹後・出雲・吉備などの出土例と異なり、単体での出土です。また、墳墓の副葬品としても取り扱っていないようです。碧玉製管玉は、一般に装飾品と考えられていますが、階層分化がみえ始めた北部九州などでは威信財として権威の象徴とする使用が想定されています。因みに、昨年、弥生ウォークで訪れた弥生終末期の京都府城陽市芝ヶ原古墳

（弥生墳丘墓）からは、類似サイズで整えた碧玉製管玉が187点も副葬されていて威信財としての取り扱いであったことが分かります。一昨年丹後のバス旅行で訪れた弥生後期後半の大風呂南１号墓では、356点の碧玉製管玉が副葬されていました。しかし、唐古・鍵遺跡の出土例は、それらと時期的にも異なっていて、護符や祭祀具といった精神面での作用を含めてその用途を幅広く考慮する必要があると思われます。

また、近年、弥生後期後半から終末期になると日本海側の遠距離交易の交換財の１つとして碧玉製管玉に着目する意見が多くみられます。しかし、唐古・鍵遺跡の出土品は、それらと時期的に符合しておらず、遠隔地の製作遺跡を基点に集団間の互酬関係を背景にリレー式にもたらされた一品と思われます。

弥生ウォークのご案内　～ 平城京下層遺構

井上　知章

1　はじめに

奈良盆地北端部は、平城京築造に伴ない削平されていて、東南部に比べて遺跡数は少ないと考えられていました。発掘事例が少なく遺跡間の関連性が不明のため、奈良市内の弥生期の遺構や遺物の出土地点を半径300mの範囲で15の地区に分類し整理されていました。しかし、近年は、発掘調査も進み、地域の集落動向も一定程度分かってきています。遺跡を並列的に評価するのでなく、幾つかの集落群に分類することが可能となっています。今回の弥生ウォークは、その点に留意して平城京下層遺跡を訪れたいと思います。

2　奈良警察跡地

最初に、前期の水田祉が検出された奈良警察署跡地の下層遺跡（三条二坊十四坪の前期遺跡検出面）を訪れます。調査区内を流れる流路と水路・畦畔さらに580面の小区画水田など前期の水田遺構（下写真 調査地全景）が検出されています。「からこかぎ」23号に遺跡を紹介をしていますのでご参照ください。また、道路を挟んだ東に隣接する奈良市375次調査地点（左京三条三坊三坪 検出面標高60ｍ）からも水田遺構（流路と溝と中期末～後期初頭の井堰）が検出され、さらに南西に隣接する奈良市655次調査地点（左京三条二坊十一坪検出面 標高59ｍ）からも水田遺構（水田跡・畦畔・水口、前期の石包丁）が検出されています。いずれの調査地区からも旧佐保川と想定される流路が検出されています。佐保川は、若草山の石切峠付近に水源をもち、若草山を回り込むようにして奈良盆地に入ります。旧佐保川は、奈良市役所付近より上流では扇状地帯を形成し、それより下流は自然堤防帯を形成するとの地形の変化が報告されています。従って、奈良警察跡地周辺は、旧佐保川が形成した扇状地端部に相当し、その緩傾斜を利用した前期からの水田経営がなされていたと考えられます。

なお、奈良警察署跡から西に800ｍの奈良市219次調査地点（三条一坊十坪・南大路南二丁目地区 検出面標高62ｍ）からは、前期の土坑が１基検出されています。土坑からは、前期の土器や磨石（すりいし）に加え竪杵・竪櫛・高杯などの木製品や炭化米が出土しています。磨石は、縄文時代に堅果類をすりつぶした礫石器ですから、縄文期以来の採取生活に稲作を加えたベストミックスともいえる当時の生業が想定できます。それは、三方を丘陵に囲まれた地の利を生かしたものといえます。

3　大安寺西遺跡

大安寺西遺跡に向かう途中の奈良大学発掘調査地の左京四条三坊十一坪下層からは、縄文晩期中葉の滋賀里

３式の土器が出土しています。周辺の左京三条四坊十三坪（油坂遺跡 晩期の堅果類の貯蔵穴６基）をはじめ三条四坊・五坊からも縄文後期～晩期の貯蔵穴や土器が多く検出されています。縄文前・中期の遺跡は、中位段丘上にありましたので、在地の縄文の人々は後・晩期には既により低い扇状地に進出していたことが確認できます。

大安寺西遺跡（左京五条二坊十五・十六坊 標高58ｍ）は、奈良県立図書情報館の建設に伴ない調査された遺跡です。調査地は、明治時代に築造された大池の池底で付近の旧佐保川が形成した自然堤防の中にあります。検出された自然河道からは縄文後晩期の流れ込みと考えられる土器も出土しています。弥生中期中葉、後期初頭～中葉には遺構は減少していますが、前期から古墳前期にかけて断続的に遺跡は継続し、自然河道・溝・土坑・ピットなどの遺構が検出されています。しかし、遺跡からは、集落遺構は検出されていませんが、本遺跡を含め付近での継続した集落活動が予測されます。報告書では、弥生時代の居住域の中心地は南または南西の方向と予測していますが、地形的には東ないしは北東の方向も考えられます。なお、左京六条三坊十二坪からは、奈良時代の舟入遺構（船の荷揚げ場）が見つかっています。

４　柏木遺跡

昼食を挟んで大安寺西遺跡から800ｍ南西にある柏木遺跡（標高58ｍ）を訪れます。遺跡からは、南北方向の溝の西側に沿って弥生中期の方形周溝墓18基・土器棺墓１基（右写真 方形周溝墓群 ネット画像）が出土し、一部には組合わせ式の箱型木棺の埋葬施設が残っていますが副葬品は出土していません。また一部の周溝には陸橋が残存するものもあります。柏木遺跡に北に隣接して南新遺跡（四条一坊十三坪）からも方形周溝墓が９基検出され、一体の墓域と考えられます。

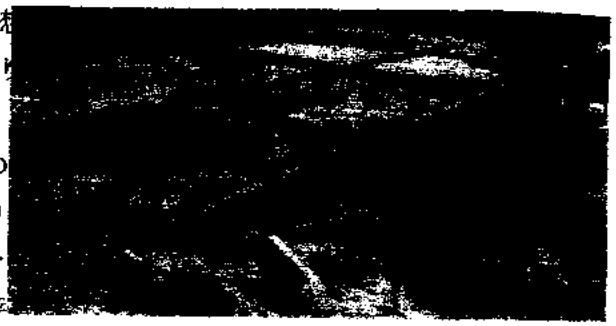
一方、四条一坊十四坪にあたる奈良県調査では、竪穴住居５棟・溝12条・流路１条・土坑・ピットが検出され、弥生中期中葉～後葉の土器やサヌカイトの剥片石器や石包丁・石斧などが出土しています。また、市調査457次地点（四条一坊十四坪）からも同時期の区画溝が検出され、中期の土器に加え緑泥片岩の石包丁・サヌカイトの石族・小石刃・石斧・砥石が出土しています。なお、県調査から北西500ｍの市調査197次（右京四条一坊一坪）では、後期の竪穴住居１棟・溝３条・土坑などが検出され、後期土器やサヌカイトの石鏃・石錐・剥片が出土しています。このように、最近の発掘成果は、先述した15地区のうち四条大路地区と柏木地区は、一括した集落域であることを示しています。

５　佐紀遺跡

先述した奈良市219次調査地点を経て、平城宮跡歴史公園内の「平城宮いざない館」の見学を終えた後、平成３年に奈良文化財研究所が調査（224次）した平城京壬生門北方（下層）を訪れます。遺跡からは、弥生期の竪穴住居５棟が検出され、前期土器（少量の中期土器を含む）のほかにサヌカイト剥片を多く出土し、石包丁８・石鏃65・スクレーパー６・石鑿１・石槍３・磨製石斧１・石錐２点などが出土しています。また、隣接する216次調査（壬生門北方 奈良市219次調査から北300ｍの地点）では、石包丁の出土やプラント・オパールの分析データから付近の水田遺構の存在が推定されていました。奈良警察跡地下層で検出された同時期の水田遺構は、それを裏付けました。

最後に、昭和38年に奈良国立文化財研究所が調査（14次）した平城宮西南隅の佐紀遺跡を訪れます。酒井龍一奈良大学名誉教授は、盆地北端部の拠点集落として佐紀遺跡を挙げ、平等坊・岩室遺跡との間に別の拠点

集落の存在の可能性（その後、八条北遺跡の大規模方形周溝墓群が発見されています）を指摘していました。佐紀遺跡からは、後期の竪穴住居20棟、埋葬土坑を含む多数の土坑と数条の溝（下写真 弥生遺構全景）が検出され、遺物は多量の土器と１斗ほどの炭化米と石器・木製品が出土しています。しかし、拠点集落であるかはともかくとして、平城宮壬生門北方遺跡とは、時期を異にした集落遺構といえます。むしろ、平城宮壬生門北方の集落域を中心に奈良警察署跡地までの生産域を含んだ集落域を想



ち、佐紀地区・二条大路南地区・大宮地区を含んだ集落域となり

6　さいごに

以上のとおり、平城京下層遺跡は、最近の発掘調査で、地域の集落動向が分かるようになりました。弥生前期は、先述のとおり平城宮壬生門北方から奈良警察署跡地下層遺構に至る生産域を含む集落が考えられます。また、中期になると、四条一坊十四坪周辺の集落域と柏木遺跡にいたる墓域を含む集落が想定できます。後期になると今回は遠望となりますが、ＪＲ奈良駅周辺の大森遺跡や杉ヶ町（するがまち）遺跡などの後期の集落がみえてきます。

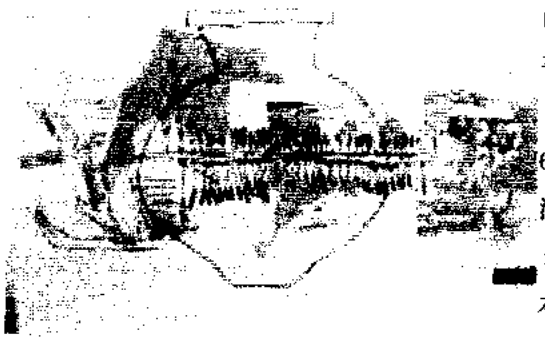
奈良市内では、二つの銅鐸出土地点があります。市北西部の秋篠町の尾根からは、外縁鈕式袈裟襷文銅鐸２点・扁平鈕式袈裟襷文銅鐸２点計４点出土しています。市南東部の山町の尾根斜面から秋篠町銅鐸よりも古い時期（中期初頭）の外縁鈕式流水文銅鐸が出土しています。今回訪問する平城京下層遺跡との関連の有無も含めて考えてみたいと思います。

遺跡紹介　荒尾南遺跡～美濃最大の集落遺跡

弥生ウォーク世話人グループ

1　はじめに

岐阜県大垣市荒尾南遺跡は、濃尾平野の西北部に位置します。大垣市周辺は、北陸・近畿・東海を結ぶ交通の要衝として弥生期・古墳期の遺跡が集中しているところです。その中で、荒尾南遺跡（以下、「遺跡」という。）からは、縄文晩期から中近世におよぶ竪穴住居や方形周溝墓や大小の溝などが多数検出されています。中心となるのが弥生後期～終末期の遺構・遺物です。その多くは、平成18年から実施された東海環状自動車道建設に伴なう調査で明らかになったものです。今回は、その発掘報告書をもとに紹介します。

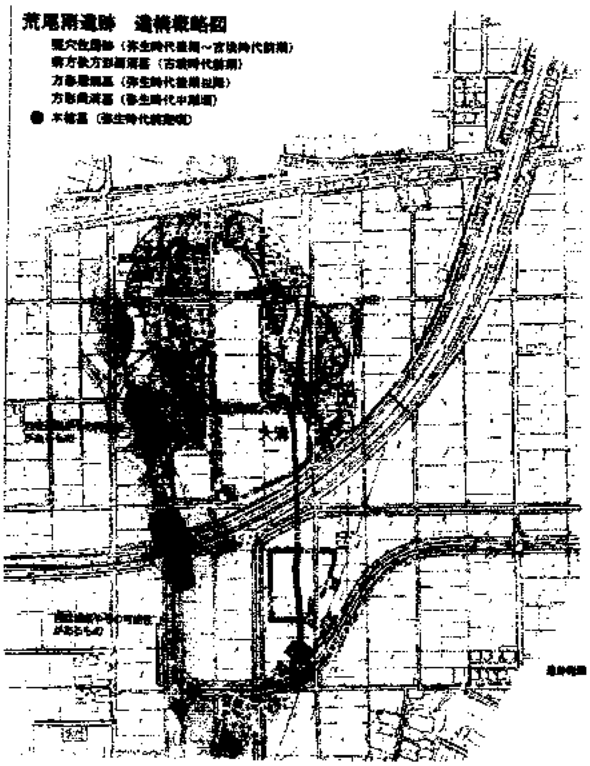


なお、遺跡は平成２年の遺跡分布調査で確認されていて、平成6年度には、大垣環状線の道路建設に伴なう調査で４基の方形周溝墓（後期）が検出されました。その内１基の周溝からは、イチョウ型の３艘の大型船と82本の櫂（オール）と風にたなびく６本の旗を描いた壷（左写真 ネット画像）が出土し、全国的に注目を集めました。

2　遺構

遺跡は、北端は低位段丘面の末端にかかり、扇状地端部と旧河道が形成した自然堤防上にあります。東西250ｍ・南北750ｍと広範囲におよび、北部をＡ地区、それから南をＢ・Ｃ地区と分けて調査されました。順次、弥生期の遺構面を報告します。

（１）Ａ地区



Ａ地区（調査面積10569㎡）から、縄文晩期前半の竪穴住居跡が１棟（Ｂ地区では２棟）確認され、遺跡での最古の活動痕跡が認められます。遺跡からはその時期の大洞式土器（一宮市馬見塚遺跡にも出土例）が出土しています。しかし、弥生前期の遺構は、検出されていません。弥生中期中葉～後葉になると、集落域は判明していませんが、周溝墓46基（終末期は３基のみ）が検出されました。ところが、後期以降になると竪穴住居94棟（建て替えを含む。以下、同じ。）が4～5箇所の群構成（うち、終末期は67棟）で検出され、あわせて掘立柱建物２棟・溝状遺構134条・土坑895基が検出されています。弥生後期から終末期には墓域から集落域に変化し、特に終末期に増加しています。また、竪穴住居と比べ掘立柱建物や高床式建物が少ないことが分かります。

（２）Ｂ地区

Ｂ地区（調査面積15396㎡）では、前期の方形周溝墓が10基、土器棺墓２基検出され、地域で余り見られない木棺墓９基（畿内の影響が認められる組み合わせ式箱型木棺を含む）が検出されています。さらにＢ調査区南西部の旧流路から前期の遠賀川系土器が多数出土（在地の亜流遠賀川系土器・条痕文系土器が少数）し、遺跡は弥生文化の東進ルートと考えられます。

しかし、中期以降はＢ地区はＡ地区と同様の変遷がみられます。弥生中期は周溝墓36基・土壙墓１基が検出され、後期から終末期にかけては、竪穴住居24棟・掘立柱建物７棟・柱穴148個・溝状遺構243条・土坑1059基など多くの集落遺構が検出されています。また、遺跡西部からは旧河道が検出され、伐採樹木や割材が出土しあわせて農具の未成品が多く出土することから農具を中心とした木製品の製作が予想されています。因みに、大溝の東からは弥生終末期の83区画ほどの小区画水田（10㎡以内）が東西50ｍ南北70ｍの範囲で検出されています。

一方、遺跡東部には、Ａ地区からＢ・Ｃ地区に及ぶ中期の大溝（長さ450ｍ幅最大20ｍを含む10ｍ、深さ1.5ｍ）が掘削され、西部の旧流路との間で継続した集落活動が展開されています。Ｂ地区の大溝からは、後述しますがベンガラを塗った重圏文鏡や桃核や赤色・黒色塗料を塗布した手捏ね土器が出土し、一宮市八王子遺跡を髣髴させる祭祀行為が予測されています。

（３）Ｃ地区

Ｃ地区（調査面積7160㎡）は、弥生中期の周溝墓38基に引き続き後期～終末期の周溝墓が11基と墓域が検出され、墓域は継続しています。一方、Ａ・Ｂ地区と異なり弥生中期にも集落遺構があり、終末期にかけて竪穴住居４棟・掘立柱建物４棟・柱穴158個・溝状遺構178条・土坑925基などが検出されています。Ｃ地区は、先述したとおり、その殆んどが自然堤防上にあり、Ａ・Ｂ地区と土地利用が異なっています。特に、遺跡西部の旧流路周辺で多くの遺構が検出されていますが、前期から中期前葉の時期に微高地から自然流路の落込みにかけて土砂が堆積し、中期以降の広範囲な土地利用が可能となった結果だと思われます。

Ｃ地区では、中期には剥片・砥石・石鋸などの石器製作関連の遺物が多く出土し、ベンガラの生産を含め生産域と評価されています。また、弥生終末期においても、Ａ・Ｂ地区では集落活動が活発化していますが、その

時期のＣ地区の大溝埋土から工具・農具類・紡織具・祭祀具そして建築部材（未成品を含む）が多く出土し、それらに関わる建物群も検出されています。当時の大規模集落を支える生産域であったことがうかがえます。

３　遺物

遺跡からは、350万点を越える土器が出土しています。その中には、辟邪のためか瞳の表現されない人面文土器や弧帯文・バチ形文・スタンプ文など抽象的な文様の後期から終末期の土器を含んでいます。また、1万点を越える木製品が出土しています。さらにはハイアロクラスタイトの磨製石斧やサヌカイト・下呂石製の石鏃など他地域の原石を使用した石器を含め多量の石器類も出土しています。また、使用痕跡が顕著な小型の砥石が多数出土し、各種類の玉類が出土していることから玉の生産が考えられています。

ここでは、青銅器を中心とした金属器に着目します。遺跡全体では133点出土していますが、弥生期は後期・終末期を通じ52点（39%）出土し、Ａ・Ｂ・Ｃ地区万遍なく出土する銅鏃が29点（55%）と多数を占めています。Ｂ地区からは、銅鏡と銅鐸片（右写真 ネット画像）が、Ｃ地区からは巴形銅器（前号で紹介）と円盤状銅製品などの特殊遺物が出土しています。

報告書では、円盤状銅製品をインゴットとし、出土付近の青銅器生産の関連を推定されています。しかし、青銅器生産関連遺物の出土がなく不明と思われます。

また、直径５ｃｍの銅鐸片（右上写真 ネット画像）は、双頭渦文の飾耳片です。復元すると１ｍほどの突線鈕式の大型銅鐸と推定され、三遠式銅鐸が出現する前の銅鐸です。因みに、東海・美濃地域は、菱環鈕式の鈴鹿市高岡山銅鐸・十六町銅鐸をはじめ突線鈕式初期のの朝日銅鐸・外縁鈕式古段階の八王子銅鐸など銅鐸が多く出土するエリアです。それは、畿内・近江・丹後と連なる古くからの流通網を背景にしたものと考えられます。

留意したいのは、２点の仿製鏡の出土です。１点は直径3cmの小型仿製鏡（左写真 ネット画像）ですが、もう１点の直径8.5cmの仿製鏡（右下写真 ネット画像）が注目されています。それは、鏡背面の鈕周辺に珠文に円弧を巡らせた文様を13個単位に配置した東海地方の最古級の重圏文鏡です。重圏文鏡は、全国集計では54点と少なくさらに弥生期は７例と少ないのですが、遺跡からは２個出土しています。また、古墳期の重圏文鏡は同心円を幾つも重ねた比較的単純な文様ですが、ほぼ完形で出土した鏡は、文様が複雑で他に類例がないとし、報告書では重圏文鏡の祖形の可能性があると指摘しています。

金華山南西の岐阜市瑞龍寺山（ずいりゅうじやま）山頂遺跡をはじめ名古屋市朝日遺跡や高蔵遺跡などでは舶載鏡が出土しています。特に、瑞龍寺山山頂（標高158m）からは濃尾平野が一望でき、墳長46mの方形の弥生墳丘墓に副葬された舶載鏡は、後期中頃の地域社会の再編が始まる時期のリーダーの象徴と評価されるものです。それは、東海系文化が信州から北関東、静岡以東の南関東に広がる時期に相当します。しかし、荒尾南遺跡の仿製鏡の時期は、後期後半から終末期の東日本に及んでいた東海系文化が大阪湾・大和に出現する時期と符合します。

荒尾南遺跡は、多数の遺構・遺物が出土する大規模集落というだけでなく、地理的特性をいかし、他地域と継続して交流する遺跡として弥生後期から終末期の地域動向の関連で注目されます。

（編集委員）

東　治雄　井上知章　植田洋高　谷口敬子　福島道昭　藤原隆雄　万徳順一　宮川真由美